

アメリカにおける日本史研究

アーヴィン・シャイナー

西洋での日本史研究は、第二次大戦後このかたアメリカの学者が先導している。太平洋戦争に因り、合衆国政府は大へんな努力をして、数千人の特に優秀な大学卒業生に日本語の訓練を施した。彼らは軍隊の各方面で翻訳や通訳の任にあてられた。また戦争で「敵を知るために」、政府は日本および日本人についての社会科学的研究を委託し、それを「戦後日本の民主的改革」の遂行に供すべく企てた。

ベネディクト Ruth Benedict の「菊と刀」も政府の戦時情報局が後援したのであり、ライシャワー Edwin O. Reischauer のような日本古代研究者も、陸軍国務両省勤務という期間が、日本の「失敗した」民主的伝統を研究する刺激となったのである。

日本研究という領域にとつてより間接的ではあるが、それでも重要なものとして、戦争—欧州大戦のために、ヒトラーの治下をのがれた数百ものドイツの社会学者のアメリカ移住がある。アドルノ Theodor Adorno・ポラック Fre-

derick Pollack・フロム Eric Fromm・ローヴェンタール Leo Lowenthal・ノイマン Franz Neumann のフランクフルト学派の人々は、アメリカの大学に職を得、ヨーロッパの社会学を導入した。そしてヴェーバーやジンメルジンメルの社会学・ネオマルキシストの香りはアメリカの教授や大学院生に学究的な蘇生ルネサンスをもたらした。

アドルノの全体主義思想に関する優れた研究、自由に対する人間の恐怖を取り扱ったフロムの「自由からの逃走」そしてノイマンのドイツ・ファシズムの大規模な分析である「ビヒモス」などは、多くの研究者を他国との比較研究に向かわせた。さらに重要なことは、プラグマチックで経験主義的なアメリカの学者に、理論武装の魅力と意欲・イデオロギーの輸入とその重要性を認識させたことである。

大戦以前にも日本を研究する西洋人はむろんいた。しかし言語の上では G・I たちほど熟練している者はまれだった。ましてや「アジア」地域への学者の大量進出などはな

かった。太平洋戦争前の日本研究は、宣教師や外交官といったアマチュアに占められていた。鋭いそして流麗な文体に恵まれた何人かのひとがいる。たとえばスコットランドの宣教師マードック Murdoch、かれは大量の日本の史話を書いている。「徒然草」を英訳し、「日本語の文語文法」を著わしたサンソム卿 Sir George Sansom の如きは、数冊の日本史を書きついには徳川時代にいたる研究を三巻本にまとめている。しかし彼は描写や叙述には熱心であったが、分析は殆んどやろうとはしなかった。彼にとつては、日本人の性格や社会をあらちちあたつて、よどみなく甘美な物語風に書けば十分であったのだ。

ただ一人、宣教師の息子に生まれ、カナダの外交官となつたノーマン E. H. Norman だけがこの型式を破つた。彼は日本史の研究でコロンビア大学から博士号を受け、その後モントリオールのマックギル大学で研究を続けた。フアシズムの抬頭に衝撃を受け、日本のマルクス主義学者の影響もあり、かつヨーロッパの歴史にも精通していた彼は、その分析力と、ほとんど匹敵する者が無い理論的鋭敏さとを駆使して、近代国家日本の成立ならびに日本の政治の封建的背景を研究し、アメリカのすべての日本研究者に影響を及ぼした。戦後日本の指導的な学者の業績に対すると同様に、戦後の新しいアメリカの学者たちが、修正を

試みたり反撥したりするのが、ノーマンの業績なのである。

これら戦後の学者の多くは、ニューディール期に育つた。すなわちヨーロッパやアジアでの全体主義の台頭を研究することに学生時代を費やし、数年間の軍隊勤務中に「民主主義を衛るべく」鍛え上げられた。彼らは強烈な自由—民主主義の前提（未形成であつたかもしれないが）を抱いて日本研究へと進んだのである。彼らは一国が非民主主義的になる理由について理解しようとして、また論争を用意した。社会学者であれ人類学者であれ政治学者であれ、戦後の日本研究のほとんどは、みな史的内容を持つ研究をした。

パークレイ（カリフォルニア大学）の政治学者スカラピロー Robert Scalapino は、戦前日本の政党政治の動きと崩壊について大きな研究をものした。スタンフォード大学政治学科の池信隆は自由民権運動を検討した。戦前に平安時代の文学と宗教を研究していたライシャワーは数冊の本を著わして、日本には真の民主主義的伝統はあつたのだ、フアシズムの異常な台頭により一時中断されたのだ、との論証を試みた。

これらの学者やその他の人々にとって、日本の過去とは

「フアシズムの理由」「民主主義の可能性」を理解する鍵を提供するものであつた。その史的分析判断が持つ現実への警告はもとより、彼らは誰れ一人として「フアシズム論」「民主主義論」が持つイデオロギー的な問題性に無関係ではありえなかつた。そこでやがて、日本での学問動向が彼らを深く刺激した。労農派・講座派の戦前日本の評価、おなじく戦後の歴史グループのイデオロギー論争、とりわけ後者の遠山茂樹教授のすぐれた業績がアメリカの学者を刺激して、徳川期における近代日本の起源 (Tokugawa roots of modern Japan)・階級闘争の農業基盤・日本の「絶対主義者」「帝國的」「資本主義的」社会の分析へ向かわせたのである。

しかしアメリカの学者は日本の歴史研究の成果やその理論的結論の恩恵を受けながらも、基盤となるマルクス主義の意味とその研究の結果とを受け容れる者は少なかつた。アメリカの学者が欲したのはデモクラシーであつて、共産主義でも社会主義でもなかつた。だから日本人研究者の過度に決定論的でイデオロギー的な構成に感情を害することが多かった。さらに多くの人々はヴェーバーのマルクス批判・「没価値性」に基づく発展・諸類型に魅せられていた。そこで日本の研究者が提起した諸問題のうち、階級闘争史観を受け容れるのではなくして、彼らは社会的な総意

(social consensus) や宗教構造を討議したのである。絶対主義—資本主義—帝国主義の発展の記述とは対蹠的に、彼らは、価値と制度の研究を強調するところの新らしく発達した近代化理論を据えた。うたがいはなく彼らは米ソ間の「冷戦」・イデオロギー論争に触発されていたのである。しかし彼らは、ややお世辞的になるが、日本人研究者の成果が彼ら自身の励みとなり努力を促したように、アメリカ人研究者も日本人研究者に貢献するところの一連の概念と組立てを提供し、かなり建設的に対応しようとした、と言つてもさしつかえ無いと思う。

アメリカの歴史家と日本近代史

過去二十八年間に、徳川・明治・大正・昭和の各時代に關して数百の著書・数千の論文が書かれた。全然狂つたものもあり、大ていはいはできのよくないものだが、全体として事実の面で・分析の面で、なにがしかの貢献をしており、数十点位は近代日本の研究に多大の貢献をしている。この貢献のほとんどは、つぎの六人を中心とする。ホール John W. Hall・ジャン・マリウス・ジャンセン・スミス Thomas C. Smith・クレイグ Albert Craig・シラ Robert N. Bellah、そしてロソフスキー Henry Rosovsky。

最初の三人は、いま五〇才台で、みな海軍の日本語講習所で訓練を受けたのち、太平洋戦争で軍務に服した。

ホールは東京で宣教師の家庭に生まれ、京都で育ったのち、帰米してアンドーヴァア子科・アマースト大学に学び、現在エール大学のグリスウォールド教授である。ジャンセンはオランダで生まれ、幼時にアメリカ合衆国に移住し、プリンストン大学に学び、現在同大学で教鞭をとっている。スミスはコロラド生まれ、カリフォルニア大学に学び、一九四二年海兵隊に入るまでは同大学(パークレイ)大学院でフランス史を専攻していた。現在はパークレイの比較史のフォード教授となっている。

クレイグはハーヴァードの歴史学教授、ベラはパークレイ比較史のフォード教授、ロソフスキーはハーヴァードの経済学部教授で学部長である。この三人は現在四〇才代後半で、戦争の末期に陸軍に入隊した。クレイグは中西部出身、ノースウエスタン大学で哲学を専攻した。ベラはカリフォルニア出身、ハーヴァードで社会学を学んだ。ロソフスキーはロシアの亡命者の子としてダンチツヒで生まれたが、戦雲ただならぬ中両親とともにブリュッセルに逃れ、ついでフランスへ、最後には合衆国に渡り、ヴァージニアのウィリアムメアリー大学で経済学を修めた。

以上の六人はみなハーヴァードで博士号を得ており、ベ

ラ(社会学者)とロソフスキー(経済学しかし経済史家)を除いては、みな歴史学者である。このことは、今さら贅言を要しないが、日本研究の戦後間もない頃の主要研究センターがハーヴァードであったこと、そして最も感銘的な日本研究が歴史学からおこった、ということを示している。

ホールとジャンセンが全面企画編集した日本近代化論に関する五冊の叢書がプリンストン大学から出版されているが、その中には他の四人も執筆している。この叢書は、アメリカにおける日本研究の主要な課題の頂点をなすもので、もちろん執筆者それぞれの最高作というものではないにしても、この刊行は、後述するように、アメリカの新しい理論的な研究方向を象徴的に示している、と言えよう。歴史・経済・政治・文学と分けられているこの叢書は、あるイミでは、近代日本の各分野にわたる論考の富くじ箱のようなものであり、非マルキストの立場での日本の近代化論という最終的評価をうけるであろう。いささか偏見かも知れないが、類型構成の努力に欠けている、そして文章化されたかぎりでは、個々の論文のつなぎ合わせであったように見える。すなわち経済の発展にかかわる農業の役割りについての理解、近代科学の発達に果たした儒学者についての早急すぎる評価、かくして要するに近代日本は単一

体ではなかった、多様性や相克や差違があった、ということとを納得させようとするものであると思う。

しかしながら個々の業績について見れば、この六氏はみな日本の近代化の迅速さについて、徳川期社会が果たした役割りを新たに直視しようと企てる。もともとロソフスキーは徳川期を軽視して、明治の経済発展を分析する新しい理論的類型を提出しているが、そして全体として彼らは制度史・経済史・社会経済史を重視し、多くの部門で日本の成功面・到達面を論じ、近代化の「失敗」ないしは破滅について述べるのがすくない。

初期封建時代から徳川時代に至るまでの大名制度の発展を研究したホールの主要業績は、制度史研究の嚆矢ともいふべきものだろう。近代市民社会成立の基盤となるべき戦国期自由都市の没落を嘆く多くの歴史家と異なり、彼は徳川社会の創設能力を強調した。織豊大名から近世大名への各段階は一定の制度上の改良や官僚制の改革・より一層の支配の合理性を示している。実にこの合理性、経済・宗教・社会にわたる合理化というのが、すべての研究の中心となっている。ホールは官僚制の合理制を強調した。ヴェーバーの線に沿って、徳川期の制度発展のなかに、ルイ十四世期のフランスや一九世紀プロイセンの新らしい統治機構の発展との平行類似現象を見る。

早期近代ヨーロッパは迅速に発展した。それは非人格的な制度が経済発展と社会統制とを真に達成させるために全精力をそそぐ手段を用意するものであった。そうすることが有効であったのだ。

同様に日本でも大名制度は効果として徳川社会の全分野での大改革を可能にしたのである。サムライを官吏にかえたこと、官僚的職務によって封建的契約ではないカタチで君主に従属させたこと、またサムライを土地からきり離して城下町に住ませたことなど、大名は一挙に近世的官僚 proto-modern bureaucrats を創った。反抗する土サムライの明治の社会変革に抵抗するかれらの脅威を消した。サムライが明治政府のより一層の官僚制化や中央集権化にほとんど抵抗しなかったのは、その勢力の拠って立つ場を持たなかつたからである。彼らは大名に依存し、すでに権力配分や上意下達の官僚機構に順応していた。すなわち大名による改制は、明治の改革・発展への行政上におけるステップであった。近代化の始まりのひとつといふことができよう、と。

ベラとスミスの本の刊行はホールの主著に先立つが、同じような分析方向をとっている。そうではあるがその後の研究で彼らは、徳川農業社会・近代日本に貢献した宗教についてかなり書き直している。スミスは、近代日本の経済

成長の農業での起源を追究して、従来の解釈を根本的に改訂し、伝統的経済が自給(生活必需品)生産から市場向け生産へ段階的に進展することをなるべく叙述した。そして彼は補足する、労働者(workers)や小作人は、身分関係や真のもしくは擬似的な家族関係の拘束によるよりも、契約による規制へ、つまり社会経済関係がしだいに自由になっていった、と。ペラは、徳川時代の価値は、近世西洋の理念でもなく、従来論じられてきた西洋の価値への転換でもない、それは新しい明治の政体や経済的社会的目標のために進んで働こうとする日本国民の形成に役立つものであることを提示した。

ペラとスミスの、みごとであるとい徳川期日本の記述は彼らの研究が近代化理論の保守的でありペラルな傾向を持つことをはっきりと示している。スミスは、農民の経済目標の変化の記述や合理的農業の成長の分析のなかで、農民の知的心理的变化を無視している。一方ペラは、「徳川期の宗教」全体の解明のなかで、また徳川期の総意(Tokugawa consensus)―「プロテスタントの倫理」の日本版―を記述するなかで、社会秩序への強い不満を示す千年王国的な指向・価値・概念を欠落させている。スミスは結局のところ、その分析を社会構造の変化に限定し、変化が生んだ結果は軽視した。一方ペラは、日本の改革は新しい指導

者・制度の交替であるとき、伝統的な価値の再編が無視できない脱落部分に影響されているということについて、なんら示唆を与えなかった。

ペラもスミスも信じた、農民が明治政府の支配に受動的に服従したのは、伝統的な規範に服従するよう、よく訓練されていたからだ、と。それゆえに両教授とも、これは変化ではない交替である、と説く。かれらは、一つの研究対象が他に移行するのは同一の形式・言語のなかで行なわれるにすぎぬ、と述べる。ペラの構造的な価値分析はたしかに優れたものではあるが、その分析は思想と変化との弁証法的な発展を見のがし、伝統的な型は変化に無感覚であるかのように考える傾向を持つ。

クレイグとジャンセンは、主として明治維新の形成にかかわってきた。両教授ともノーマンの学説(および何人かの日本人歴史学者の学説)―維新は商人や富農と結んだ下級武士によって基本的につくられたとする―を打ち倒すことにとめた。二人とも藩の結合こそが重要であると強調し、またその研究した領域内では、いかなる人物による革命的衝撃も受けていないとした。ジャンセンは、土佐藩を中心に、それにかかわる多くの「志士」を調べた。クレイグは、伝統すなわち藩官僚の「思想の枠組み」(hierarchical "frame of reference")なるものを強調した。そ

れは下級武士の活動範囲と目的とをしばっている、と。またかれは、ペラ同様に、伝統の貢献度を高く評価し、全体として「国学」の重要性―すくなくとも長州藩では改革派を動かしている―を、もしくは各地農民勢力が諸階級と連帯し革命的イデオロギーをつくりあげた役割りについては、低く評価している。ここにいたって彼は、明治の変化改革がサムライ・下層農民の維新前の連帯によって産みおとされた、とするスミスの見解と対立するのである。

ジャンセン、このひとは才気ある物語り作家の一面を持つが、無秩序すなわち変転する不明確な動機・目的を描き乍ら、つぎのように結論する、階級分析や、底流する推進力をイデオロギー的に論争し検討することでは、維新を形成した事件・人物の無軌道な過程を適切に描き出すことはできない、と。「藩」に焦点をあててクレイグとジャンセンは、過去の制度の力・拘束性・価値観が、新しいイデオロギー・革命的要求よりも、維新の創出にはより適切であった、と考えている。

ロフスキーは明治の資本主義発達を研究する基標として維新をとりあげた。彼は、経済上の変化が徳川期におきていることを否定しないが、「近代的な経済成長」が集中的に技術的に資本の成長の中で飛躍したのは維新後であ

る、という点を強調した。これについてスミスとランデス(David Landes(ヨーロッパ経済史家))は、徳川期の企業家的な指導性にみられる主要な変化を軽視しているとして、ロフスキーを批判した。だがロフスキーは、彼の量的な評価にとって、そういった要素は適切ではない、と主張している。ロフスキーはつぎのように述べている、西洋資本の大規模な導入ではなくて、余剰農産物を注意深く管理し、新しい目的のために伝統的な技術を継続的に使用することが、日本人をしてその資源を効果的に使用させたのである、たとえばロシアのように、自国の経済成長のために外国から莫大な借款を導入したヨーロッパの近代後進諸国とちがって、日本は余剰農産物を利用して伝統的技術を有効に利用したのである、と。

われわれの反応と課題

私の世代が先人から受けたものは大きい。彼らは私たちの先生であって、私たちは彼らの考え方をなぞりまた反撥して多くのものを学んだ。私たちは五〇年代の後半期に大学に入り、六〇年代に大学院に入った。先輩たちは経済と社会の繁栄期にかかわっていた、すなわち社会主義国なんかなく共産主義国の経済発展の型とは対蹠的な発展の型

とともに生きた。その発展が成功していたから、発展の近代型を日本の発展にあてはめて、西欧のそれと等しいものでありうることを指摘した。彼らの歴史研究は、何よりも制度史であり経済史である。彼らは思想上の奇行・「敗北者」に見られる無気力・常道をはなれた事件・反乱の敗因敗戦情況・徒党のめんみつな研究、などには関係しなかつた。

われわれは、そして私自身の関心からも強調するのだが、「近代化」理論が発展類型への一つの洞察となつたのは認めるが、それとともに特殊性を見失なう、と考えている。その特殊性は、考え方や感じ方やたかいたか分析してのみとり出せるであろう。先輩の強調点とは対蹠的に、私たちは社会の矛盾相剋を強調することから始めた。総意(consensus)の分析に対して、私たちは、考え方の中での変化・階級間のあつれきの研究・謀叛や反乱の調査・徒党そのものきまこまかい分析、等を対置した。すなわち私たちの世代は西洋人ではじめて本格的に日本思想史の研究に取り組んだのである。

私たちは「近代化理論」のような幅広いものを構築するつもりはない。同時にだれも他の類型にそうはげしく反撥する必要も感じていない。ベラやスマイス、ヴェーバーもマルクスも、すぐれたフランスの歴史学者人類学者・ドイツ新のおかげで富も権力も獲なかつた人々・常軌を逸した(といわれる)伝統を代表する人々、におこつた諸問題ととりあげることにある。何人かのサムライがクリスチャンになつた、これは普通の事象ではないけれども、私は、人々を伝統に結びつけていた理由を社会心理学的に思想的に理解しようとする。私の目的は、社会に結びつけられた人々が、未曾有の変転期に、社会的紐帯を破り伝統を破るにいたる緊張関係を把握することにある。

同じような脈絡から、ハルトニアーン H. D. Harootyan は、ジャンセンの「志士」についての曖昧な評価やクレイグの「国学」の重要性に対する拒絶反応とは対蹠的に、その研究「明治維新に向けて」(Toward Restoration)の中で、吉田松蔭のような人物をして急進派・社会の転覆をはかる革命家に仕立てたところの意識の総体を取り扱っている。ハルトニアーンはいう、松蔭およびその一味の政治空間ならびに「政治社会」の感覚の再評価が迫られている、と。たんに西洋の社会理念の借用や日本の理念の再構成といった理由からではなく、時代感覚と過去の理念の真の再評価、という意気込みで。

われわれの仲間がどこに行きつくか、それはいま早急に言えない。私は徳川・明治の社会での農民意識・一揆の再評価の研究を進めている。徳川末期および明治一〇年代に

アメリカにおける日本史研究(シャイナー)

の現象学者たちは、みな私たちに影響を与えた。おそらく私たちの取柄の一つは、日本史のほかにヨーロッパ史を広く学んでいる、ということである。先輩たちは軍隊で四・五年をすごした。大部分がそうではないが、私たちは、予見された類型なしに日本史を書くことにとめていた。

たとえばテツオ・ナジタは原敬(はらたかし)についてすぐれた研究をしているが、それは一般理論の過度の適用を避けて、ミカエルの政治官僚制の理論のすばらしい感覚を生かしている。ミカエル理論を忠実になぞるというのではない。ナジタは、官僚というものは抜け目のない政治家によって容易に政党化されるし、また政治家も強力で長期に構築された制度によって官僚化される、ということを明らかにした。

ナジタは戦後の諸論考の戦前日本に真の民主主義が有つたかどうかという命題を否定する。彼の研究は日本における政党政治の創立に関するものであり、長い目で見ればより重要な問題となるものである。ひきつづいて彼は、徳川期思想史に関する研究のなかで、王政復古主義者の伝統に対する多様な関心をよみがえらせようとしている。

私自身はサムライのキリスト教改宗および明治の社会反抗運動を研究している。その中で「敗北者」、政治闘争にも思想闘争にも勝利しなかつた人間をとりあげている。すなわち私の関心は、政治の指導者にならなかつた人々・維

いたる農民意識の変革の存在を明らかにしようとしている。私たちの次の世代の研究者がなすであろう業績を評価するのはいっそう難かしい。しかし彼らの課題の選択は、一揆や下層社会や思想などであつて、ここに大きい変化が起りつつあるということは確かである。さらに、私たちの先輩はまだ若いのだし、彼らも自分たちがまだ究めていない日本史の諸問題に研究の歩を歩めつつある。スマイスの徳川時代の人口の新研究・ベラの宗教の再評価・ホルルの徳川史の新見地等を、私たちは、最初に日本史の修正を始めた人々が再度修正の研究にむかつた、と考えるものである。

(訳注) Griswold Professor アメリカの大学では優れた先達の名にちなんだ名誉称号をプロフェッサーに冠して、優れた業績を挙げた後進に、その榮譽をたたえてこれを与える。後出 Ford Professor も同じ。

〈附記〉

これは立教大学史学会一九七三年度大会(一九七三・一二・一)でのシャイナー氏 Irvin Scheiner (カリフォルニア大学バークレイ歴史学部准教授)のレポートの概要である。アメリカにおける日本史研究の現状、または真の交流についての認識は案外乏しいようであ

る。彼らの研究視角の発展は、たとえば一九五〇年代の紹介「米国における日本史研究の新段階」(日本歴史一五七号、一九六一年)と、このシャイナー氏の報告とを較ぶれば、今昔の感にたえないであろう。それは同時に日本人研究者の問題でもある。というイシデ氏のレポートを紹介する次第である。

邦訳にあたっては、村上正樹・荒井悦郎両氏をわづらわしたが、レポートに現われる研究業績を網羅して註記することは一切省いた。そのような構成をふくめて責任はすべて編集部にある。シャイナー氏の主な著作・論文(日本史関係)は左の通り。

Christian Samurai and Samurai Values, in *Modern Japanese Leadership*, ed. by H. D. Harootunian & B. Silberman, Tucson, 1966.

Christian Converts and Social

Protest in Meiji Japan. Berkeley & Los Angeles, 1970.

The Mindful Peasant:

Sketches for a Study of Rebellion, in the *Journal of Asian Studies*, xxxii:4, 1973.

Modern Japan: An Interpretative Anthology (ed.), London & New York, 1974.

史苑 (1928年創刊) バックナンバー

| 巻 | 号 |
|----|--------|
| 3 | 2 |
| 4 | 4 |
| 6 | 3、4、5 |
| 10 | 2 |
| 12 | 4 |
| 14 | 4 |
| 15 | 1、3、4 |
| 16 | 1、2 |
| 17 | 1 |
| 19 | 1、2 |
| 20 | 1、2 |
| 21 | 1 |
| 22 | 2 |
| 23 | 1、2 |
| 24 | 1、2、3 |
| 25 | 1、2、3 |
| 26 | 1、2、3* |
| 27 | 1、2、3 |
| 28 | 1**、2 |
| 29 | 1、2、3 |
| 30 | 1、2 |
| 31 | 1、2 |
| 32 | 1、2 |
| 33 | 1 |
| 34 | 2*** |

□ 頌 価 * 史学科創立
40周年記念号 700円
** 100号記念特集号
(立大史学会小史) 1000円
*** 地理学特集 700円
その他はすべて 500円

■ 史苑 前号(第三四卷第二号) 地理学特集号(一一四頁)

イン下のところと
インドネシアのところ……………別枝 篤彦
湖化・湖東平野における……………友杉 孝
灌漑水利慣行と部落結合……………菊池 一雅
ベトナムの社……………正井 泰夫
千葉市の都市景観の環境……………吉田 正紀
ライ溪谷の豚祭り……………中田 栄一
災害と山村……………
別枝篤彦教授著作目録